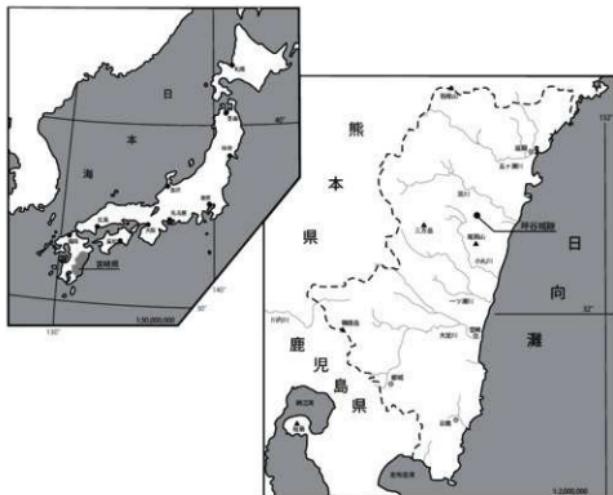


日向市所在

つぼやじょうあと
坪谷城跡

本村谷川4通常砂防工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2020

宮崎県埋蔵文化財センター



調査区遠景（南より　画面手前は坪谷川）



坪谷城跡出土遺物

序

宮崎県教育委員会では、平成30年度に本村谷川4通常砂防工事に伴う坪谷城跡の埋蔵文化財発掘調査を行いました。

本書はその報告書です。

坪谷城跡は、戦国期に日向一帯を支配した伊東氏の四十八塁に数えられる出城の一つで、現在でも曲輪や堀切などの城郭の構造物が良好に残っています。

今回の調査では、16世紀代に中国大陸で作られた青磁、白磁、青花などの輸入陶磁器類や刀装具などが出土し、当時の生活を考えるうえで貴重な資料が得られました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査・報告にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 山元 高光

例　言

- 1　本書は本村谷川4通常砂防工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した宮崎県日向市東郷町坪谷字本村295番地、299番地に所在する坪谷城跡の発掘調査報告書である。
- 2　遺跡名については、遺跡詳細分布報告書上では「坪谷城」となっているが、城跡であること、これまでの宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書において、同様の遺跡の報告を「城跡」として報告していることから、日向市教育委員会に確認の上、本報告書では「坪谷城跡」と呼称することとした。
- 3　発掘調査は日向土木事務所の依頼を受け宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4　発掘調査は平成30年10月9日から平成31年2月8日まで(現地調査日数61日間)行った。
- 5　現地での調査記録は高村哲、平井祥蔵、和田理啓が発掘調査作業員の協力を得て作成した。
- 6　整理作業は図面作成・遺物実測及びトレイスは和田が整理作業員の協力を得て宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 7　本書に掲載した空中写真は、有限会社スカイサーベイに委託を行い撮影したものである。
- 8　本書で使用した第1図「坪谷城跡と周辺遺跡の位置図(1:25,000)」は国土地理院発行の2万5千分の1図『坪谷』および東郷町教育委員会発行の『東郷町遺跡詳細分布調査報告書』をもとに作成した。
- 9　本書で使用した土層断面および遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を参考にした。
- 10　本書で使用した方位は、全て座標北で、標高は海拔絶対高である。また、本書で使用した座標は世界測地系(WGS84)九州第II系に準拠している。
- 11　本書の執筆は、第1章第1節を甲斐貴充、その他を和田が行い、編集は和田が行った。
- 12　出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに ······	1
第1節 調査に至る経緯 ······	1
第2節 調査の組織 ······	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境 ······	2
第1節 立地と歴史的環境 ······	2
第2節 中世の周辺環境 ······	2
第Ⅲ章 調査の記録 ······	4
第1節 調査の方法と経過 ······	4
第2節 調査の概要 ······	6
1 基本層序 ······	6
2 各トレンチの状況 ······	6
3 出土遺物 ······	8
第Ⅳ章 まとめ ······	12

挿図目次

第 1 図 坪谷城跡と周辺遺跡の位置図 (S=1:25,000) ······	3
第 2 図 坪谷城跡周辺地形図 (1:5000) およびトレンチ配置図 (S=1:600) ······	5
第 3 図 坪谷城跡 トレンチ 2 平面図およびトレンチ 2、8、14 土層断面 (S=1:100) ······	7
第 4 図 坪谷城跡出土青花① (S=1:3) ······	9
第 5 図 坪谷城跡出土青花②赫筒底碗および瓶 (S=1:3) ······	10
第 6 図 坪谷城跡出土白磁・青磁・国産陶磁・土師器 (S=1:3) ······	11
第 7 図 坪谷城跡出土金属器 ······	12

図版目次

巻頭図版1 調査区遠景（南より 画面手前は坪谷川）

巻頭図版2 坪谷城跡出土遺物

図版1 (坪谷城跡遠景(南西方向から)・トレンチ2(堀切状遺構) 土層断面・トレンチ3土層断面・トレンチ4土層断面・トレンチ5土層断面・トレンチ6(近～現代の石組み)・トレンチ7土層断面・トレンチ8土層断面) ··· 15

図版2 (トレンチ9土層断面・トレンチ 10土層断面・トレンチ 11土層断面・トレンチ 14土層断面・作業風景1・作業風景 2・笄) ······ 16

図版3 (高台付青花皿・鉢底青花碗・白磁1・白磁2・青磁外面・青磁内面) ······ 17

図版4 (国産陶器外面・国産陶器内面・土師器外面・土師器内面) ······ 18

表目次

第 1 表 坪谷城跡出土遺物観察表① ······ 13

第 2 表 坪谷城跡出土遺物観察表② ······ 14

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

日向市東郷町坪谷の本村谷川4地区には、避難所としての坪谷小学校（体育館）と避難道路としての国道446号を含む人家5戸を保全対象とする危険渓流が存在する。この渓流の流域内では、渓岸及び渓床の浸食が確認され、浸食部分には不安定土砂が堆積しており、近年多発する集中豪雨等によって下流域に流失し、被災を及ぼす可能性がある。

そこで宮崎県では、下流域の保全を図るために、渓流内に砂防堰堤を整備する事業（本村谷川4地区通常砂防事業）を計画した。この事業計画を受けて、事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて、平成25（2013）年度に県の関係機関である砂防課及び日向土木事務所から、県文化財課に対して埋蔵文化財保護に関する協議の申し入れがあった。事業対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地で中世の城跡「坪谷城跡」の範囲内に位置し、事業が埋蔵文化財に対して影響を及ぼす可能性が想定された。そこで宮崎県文化財課は、平成25（2013）年6月以降、砂防課及び日向土木事務所と度重なる協議を行い、平成28（2016）年2月に事業予定地内の埋蔵文化財の内容や経費積算のデータを得るため、確認調査を行った。

確認調査の結果、事業予定区域のうち、堰堤建設部及びその周辺約1,000mについて中世の山城に関連すると推測される遺構・遺物が確認されたことから県文化財課は、埋蔵文化財が確実に残存していることを日向土木事務所に対して回答した。以後、確認調査結果に基づき、開発計画と埋蔵文化財保護の方法について協議を重ね、堰堤建設を回避することは建設位置の変更等も含め下流域の安全上のため不可避であることから、宮崎県教育委員会は現状保存が困難であると判断し、日向土木事務所に対し発掘調査録保存の措置を指示した。事業実施に先立って、日向土木事務所から文化財保護法第94条に則って県教育委員会に工事通知が提出され、県教育委員会から日向土木事務所に対して発掘調査の指示に関わる回答を行った。発掘調査の実施については、宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、平成30年10月9日から調査に着手した。

第2節 調査の組織

坪谷城跡の発掘調査・整理作業及び報告書作成は以下の組織で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

調査機関：宮崎県埋蔵文化財センター

平成30年度 発掘調査及び整理作業

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	長峯 勝志
副所長兼総務課長	田中 礼子
総務担当リーダー	寺原 真由美
総務担当	主査 山崎 智子
調査課長	吉本 正典
調査第一担当リーダー	松林 豊樹
調査第一担当	主査 和田 理啓

令和元年度 整理作業及び報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	山元 高光
副所長兼総務課長	内野 真由美
総務担当リーダー	寺原 真由美
総務担当	主査 赤木 恭子
調査課長	赤崎 広志
調査第一担当リーダー	和田 理啓

事業調整

宮崎県教育庁文化財課埋蔵文化財担当 今塙屋毅行(平成 25年度～ 28年度)
甲斐 貴充(平成 29年度～令和元年度)

調査指導

五ヶ瀬町立三ヶ所小学校 校長 福田 泰典

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 立地と歴史的環境

坪谷城跡が立地する日向市は、平成 18 (2006) 年に東郷町を編入し、北は五十鈴（いすず）川南岸、南は征矢原（そやばる）川流域、西は小丸川の上流域を形成する渡（ど）川、東は日向灘に面する宮崎県の北東部の約 336km² の地域をしめる。坪谷城は現在の市域の中央西寄りに築造されており、遺跡南側を東に流れる耳川の支流坪谷川は四万十累層群と尾鈴山酸性岩類の分布域の境界線にあたる。

坪谷城跡は、珍神山（標高 828 m）から加子山（標高 866.8 m）に連なる山並みから南に延びる尾根上に立地する。南には耳川の支流坪谷川が東進し、坪谷城跡が立地する尾根との間に小さな平地が形成されており、現在の坪谷の集落が営まれている。

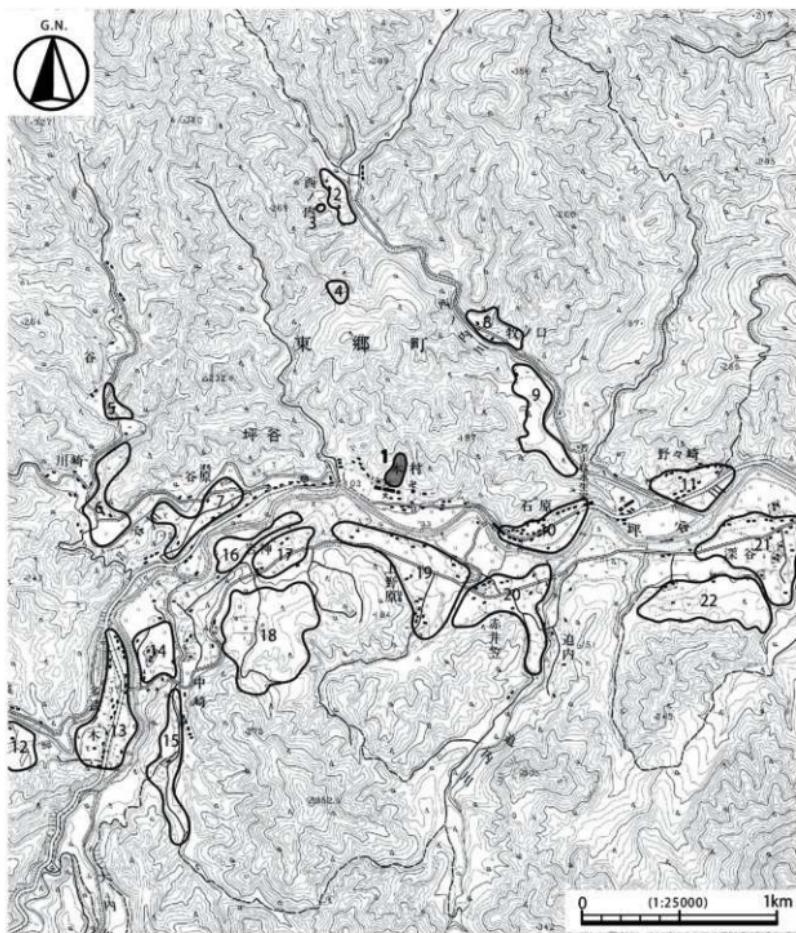
坪谷川流域で発掘調査が行われた遺跡は少ないが、調査された遺跡はいずれも一定以上の遺物や遺構が確認されている。旧石器時代にまで遡るものは坪谷川沿いの遺跡では確認されていないが、赤松遺跡では縄文時代晚期の、樅田遺跡では弥生後半の、鶴野内中水流遺跡では古墳時代のまとまった集落が調査されており、流域は先史時代からの人々の暮らしが連鎖と続いていることがわかる。

近世においては、17 世紀の末に山陰・坪谷村一揆が起こり、両村が延岡藩から天領となる契機となっている（東郷町誌編さん委員会 1979）。

第2節 中世の周辺環境

坪谷城は伊東氏の最盛期であった義祐(1512-1585)、義益(1546-1569) の代には伊東四十八里のひとつに数えられているが、文献には城名とその城主が記されているのみである。文献にある城主、米良休助重時は元亀 3 (1572) 年の木崎原の合戦で戦死している。その後、坪谷城周辺は島津氏の勢力範囲となっており、大友氏の南下により一時島津氏の勢力下を離れたようであるが、大友氏が耳川の合戦で敗れたのちは、再び島津氏の支配下となる。その後の島津討伐により高橋元種の所領の一部となり、江戸時代に入り延岡藩領となっているようである。

上記のように、坪谷城周辺に限ってれば中世の記録は非常に希薄であり、詳細は不明な部分が多い。



1. 坪谷城跡 2. 西ノ内遺跡 3. 追立遺跡 4. 坪谷出城 5. 下一谷遺跡 6. 芋の原遺跡 7. 下一谷原第2遺跡 8. 畠遺跡
 9. 深口遺跡 10. 石原遺跡 11. 野々崎遺跡 12. 渚瀬遺跡 13. 多武の木遺跡 14. 中崎遺跡 15. 大内平遺跡 16. 下
 一谷原第1遺跡 17. 岩神遺跡 18. 大堀遺跡 19. 上野原遺跡 20. 赤井笠遺跡 21. 深谷第1遺跡 22. 深谷第2遺跡

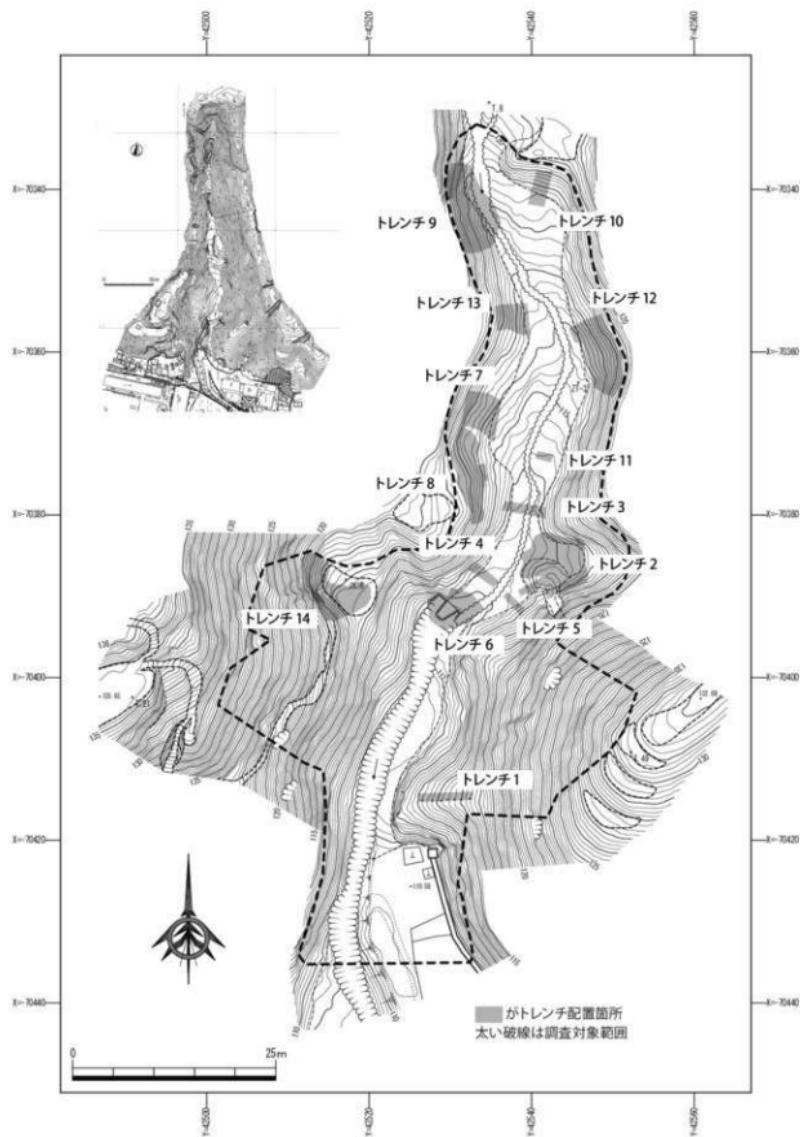
第1図 坪谷城跡と周辺遺跡の位置図 (S=1 : 25,000)

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は砂防ダム建設に伴うものであり、砂防ダム本体により掘削される部分と砂防ダムにより堰き止められる土砂の堆積する想定範囲が調査対象となった。調査対象範囲は山城本体部分にかかる箇所が少なく地形から曲輪や堀切などの構造物の可能性がある部分についてトレンチを設定、遺構が確認された場合トレンチを拡張する方法をとった。トレンチは14箇所設定した。調査の経過は以下のとおりである。

平成30年10月9日	12月7日
・作業員雇用開始	・トレンチ6調査終了
・周辺環境整備	12月13日～
・トレンチ1設定、掘削開始	・トレンチ7設定、掘削開始
10月10日～	12月17日～
・トレンチ1掘削	・トレンチ7拡張
10月12日～	12月19日～
・トレンチ14設定、掘削（青花片出土）	・トレンチ2調査終了
10月15日	12月25日～
・トレンチ1調査終了	・トレンチ8設定、掘削開始（青花片2点出土）
10月23日～11月2日	12月27日～
・伐採作業のため発掘作業中断	・トレンチ9、10設定、掘削開始
11月5日～	12月28日～平成31年1月6日
・トレンチ14掘削、拡張（青磁・白磁出土）	・年末閉庁により作業中断
11月12日～	1月9日～
・トレンチ2～4設定、掘削開始	・トレンチ9調査終了
11月14日～	・トレンチ11、12設定、掘削開始
・トレンチ5設定、掘削開始	1月10日～
11月15日～	・トレンチ12設定、掘削開始
・トレンチ6設定、掘削開始	1月22日
11月16日	・福田泰典氏調査指導
・トレンチ14調査終了	1月24日
11月19日	・トレンチ13設定、掘削開始
・トレンチ14調査終了	2月6日
・トレンチ2拡張	・トレンチ8～10調査終了
・トレンチ6拡張	2月7日
11月27日	・トレンチ11、13調査終了
・トレンチ4、5調査終了	2月8日
	・撤収



第2図 坪谷城跡周辺地形図(1:5000)およびトレーンチ配置図(S=1:600)

第2節 調査の概要

1 基本層序

調査対象地の大部分は二本の尾根に挟まれた谷部であり、頁岩の地盤の上に尾根の崩落土が厚く堆積していた。その他は斜面部分が多く、岩盤の上には10cm前後の腐葉土が堆積しているに過ぎなかった。

2 各トレンチの状況

調査区内に14箇所のトレンチを設けた。各トレンチの状況は以下に示すとおりである。

トレンチ1（第2図）

調査区の南端、土壘状に突出した尾根に設けたトレンチである。土層観察の結果、人工的な構造は確認できなかった。トレンチ1の西側尾根先端部の土層の確認も行ったが、同様に人為的な盛土や掘削などは確認できなかったため、自然地形であると判断した。

トレンチ2（第2図・第3図）

調査区西側の尾根を東西に区切る堀切に連なる谷部に設けたトレンチである。地山を形成する頁岩の岩脈が断ち切られており、堀切状に谷を整形し人為的に傾斜を強くしたもの（堀切状遺構）であると判断した。坪谷城に関連する構造物であろう。遺物は出土していない。

トレンチ3・4・5・11（第2図）

調査区の谷部に設けたトレンチである。土層観察の結果、大部分が尾根部からの崩落土で埋没していることがわかった。遺物の出土は見られず、人為的な整形の痕跡も確認されなかった。

トレンチ6（第2図・図版1）

調査区の西側斜面麓のコンクリートで固められた石組み暗渠の周囲に設けたトレンチである。トレンチ内からは暗渠に続く通路状の石組みと、暗渠東側にコンクリートが張られた平場が確認できた。遺物の出土はなかったが、コンクリートの存在などから近現代に機能していた水汲み場だと判断した。

トレンチ7・9・12・13（第2図）

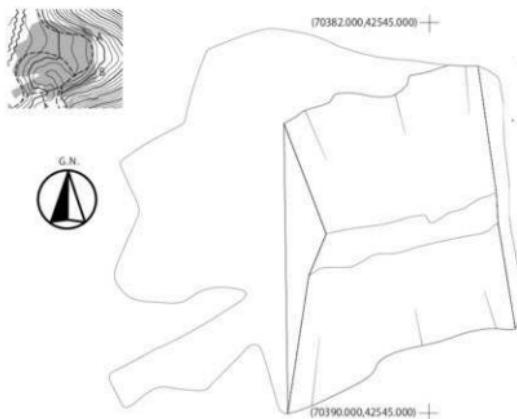
調査区の東西斜面に設けたトレンチである。各トレンチ共に、地山面から10cm前後の腐葉土層があるのみであった。明確な人為的整形は確認できなかったが、傾斜を強くするために何らかの手が加えられている可能性はある。トレンチ12から青花片（第5図26）が1点出土している。

トレンチ8（第2図・第3図）

調査区の西側に位置する平場状の地形が認められた部分に設けたトレンチである。トレンチからは青花片が若干出土した。土層観察の結果、平坦な整地層が確認できており、何らかの人為的な整形が行われていたと考えられるが、その性格については調査範囲が限られていたこともあり判然としない。

トレンチ10（第2図）

調査区の北端に隣接した基壇状の平場へ続く斜面に設けたトレンチである。土層観察の結果からは、人為的な整形の痕跡は認められなかった。基壇状の平場は、東側奥にコンクリート壁で囲まれた施設があり、近現代に存在した家屋や倉庫などを設置するために整地されたもので、城郭には関連しないと判断した。

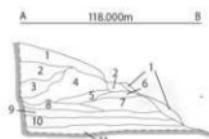


トレンチ 2 平面図 (S=1:100)



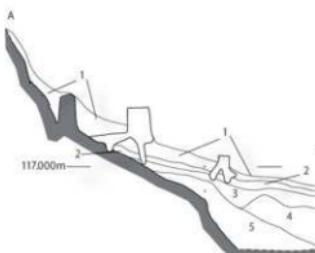
1. 黄褐色 (10YR5/6) 粘土混疊 地山が崩落した土が主体。
2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト混疊 1層と同様の組成。
3. 黒褐色 (10YR3/2) シルト混疊 1, 2層同様に地山崩落土が主体。
4. 褐 (10YR4/4) シルト混疊 径 2~5cmの地山崩落土が主体。
5. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト混疊 径 10cm以上の地山崩壊疊を 3%ほど含む。
6. にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト混疊 径 2cm前後の地山崩落土が主体。
7. 黄褐色 (10YR5/6) 粘土混疊 径 2~10cmの地山崩壊疊が主体。
8. 褐 (10YR4/4) シルト混疊
9. 黒褐色 (10YR3/2) シルト混疊 黒褐色 (10YR3/2) シルト混疊

トレンチ 2 土層断面図 (S=1:100)



トレンチ 8 土層断面図 (S=1:100)

1. オリーブ褐 (2.5Y4/3) 粘土混疊
2. オリーブ褐 (2.5Y4/4) 粘土混疊
3. 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土混疊
4. 明黄褐色 (10YR6/8) 粘土混疊
5. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土混疊
6. 褐 (7.5YR6/8) 粘土混疊
7. 黄褐色 (7.5YR7/8) 粘土混疊
9. 褐 (10YR4/6) 粘土混疊粗砂
10. 黄褐色 (10YR5/6) 粘土混疊
11. 黄褐色 (10YR5/8) 粘土混疊粗砂



トレンチ 14 土層断面図 (S=1:100)



第3図 坪谷城跡 トレンチ 2 平面図およびトレンチ 2、8、14 土層断面 (S=1:100)

トレンチ 14（第 2 図・第 3 図）

調査区の西側斜面に傾斜が緩やかになった平坦部があり、確認調査時にも輸入陶磁器片が出土していたので、この部分が曲輪などの城郭施設であるかを検討するために設けたトレンチである。

土層観察の結果、平坦部は、西側斜面が地すべり状に崩落したのち、土砂が堆積して形成されたものと確認され、曲輪などの城郭に関連する施設ではないことがわかった。

遺物の大部分はこのトレンチからの出土であり、坪谷城の主郭が直上にあることから、地すべりに伴って転落したものと判断した。

3 出土遺物（第 4 図～第 7 図）

出土遺物は、トレンチ 14 から最も多く出土しており、その他、トレンチ 8、12 等から出土している。輸入磁器類が大半を占め、凡そ 16 世紀後半位に位置づけられるものである。

1～4 はトレンチ 8 から出土した青花の高台付皿である 1～2 は端反りの口縁をもつもので、2 は熱を受け釉調が変色している。3 は口縁部が残っていないが、全体の形状から同様に端反の口縁をもつものであると考えられる。2 と同様に被熱による変色が認められる。4 は口縁部の形状から輪花皿になると考えられる。

5～22 はトレンチ 14 から出土した青花の高台付皿である。5 は外面に重ね焼きを行った形跡が残る。6～17 は端反りの口縁をもつもので、6～11 は口縁から底部までが残存しており、10、11 は熱を受け変色している。12～17 は口縁部のみの破片である。12 および 15～17 は熱を受け変色している。18 は見込み部の破片で、19～22 は高台部分から体部にかけての破片である。22 は被熱による変色がみられる。

23～37 は青花の碗である。23～25 はトレンチ 8 から出土したもの、26 はトレンチ 12 から、27～37 はトレンチ 14 から出土したものである。28、35 に被熱による変色がみられる。

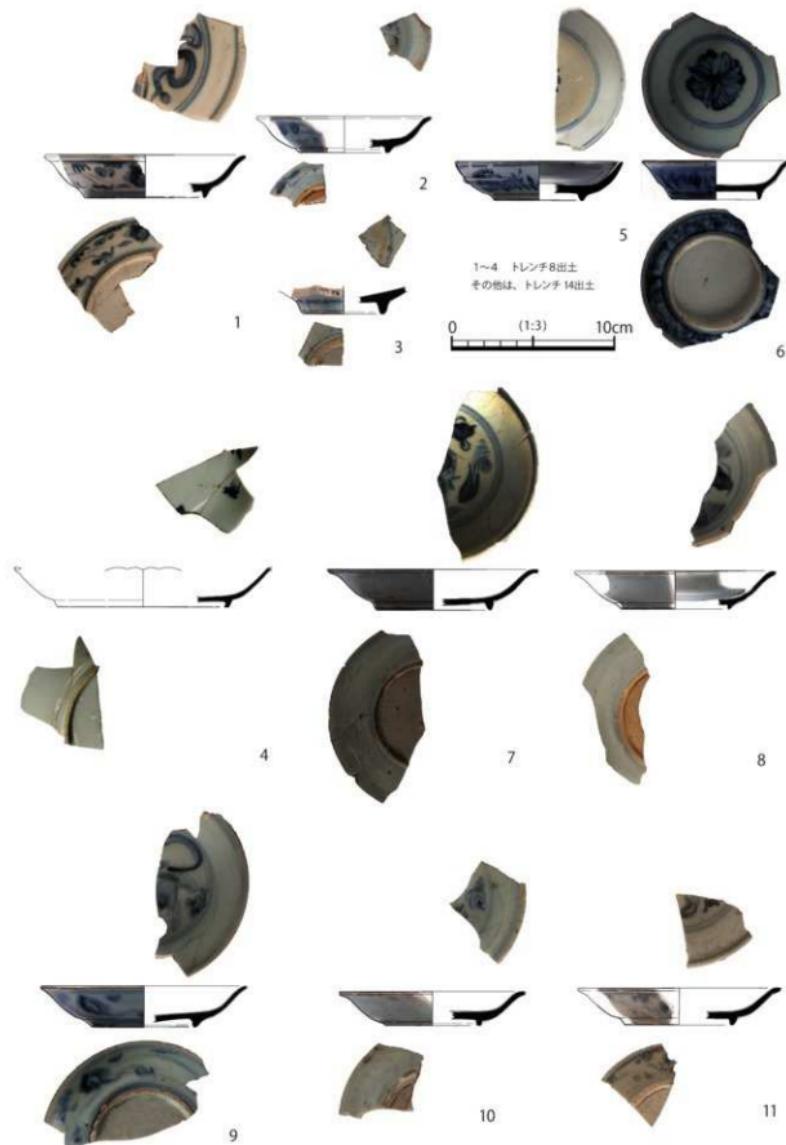
38～41 は甚筒底を呈する青花碗である。全てトレンチ 14 から出土しており、40 は被熱による変色が認められる。39 は見込み部に「寿」の異体字が絵付けされている。42 はトレンチ 14 から出土した青花の瓶の頸部で欠損した把手が確認できる。

43～63 は白磁である。43 はトレンチ 7 から、44 はトレンチ 8、46 はトレンチ 13 からそれぞれ出土した皿である。45 はトレンチ 10 から出土した碗である。47～63 は全てトレンチ 14 から出土した。47～62 は高台付きの皿で、47 は口縁部が直線的に伸びるもの、48～58 は端反りの口縁部をなす。59～62 は底部付近の破片である。63 は碗の底部で、体部にトビガンナの痕跡が確認できる。

64～67 は青磁碗、68、69 は青磁の菊花皿である。64 はトレンチ 8 から、そのほかはトレンチ 14 から出土した。64、65 には鷺蓮弁文が確認できる。66 は熱により釉調が変色している。

70～73 は国産陶器で全てトレンチ 14 から出土している。70～72 は甕で 73 は擂鉢である。

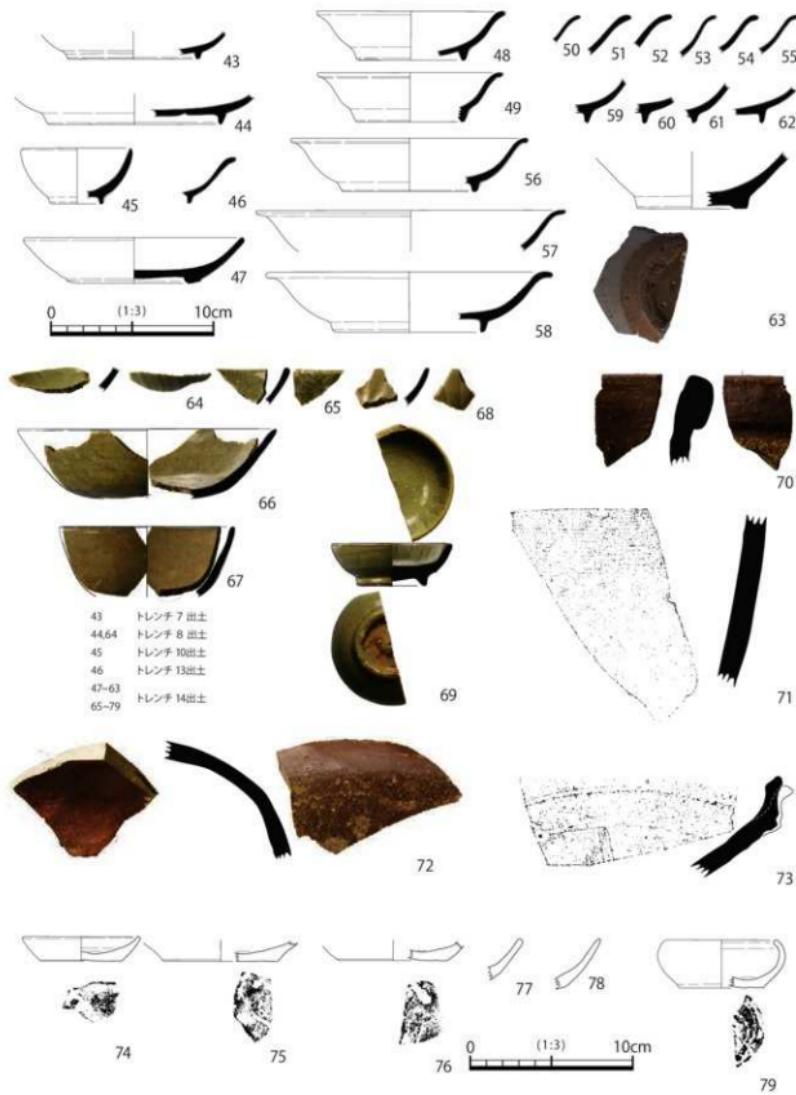
74～79 は土師器で、全てトレンチ 14 からの出土である。74 は皿、75～78 は皿もしくは壺で、79 は大きく内湾する体部を持つ壺である。



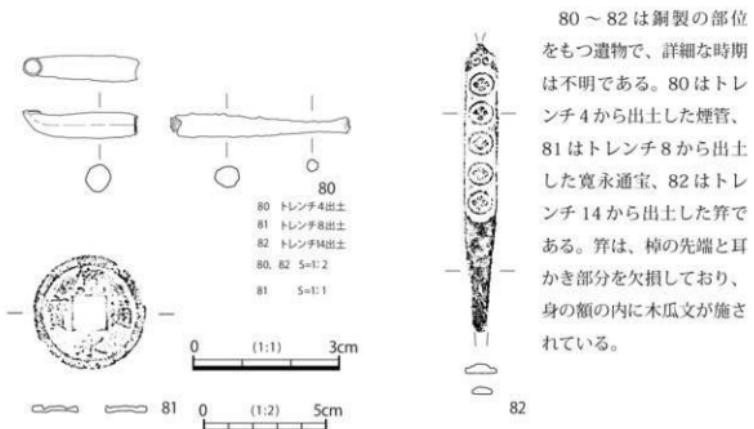
第4図 坪谷城跡出土青花① (S=1:3)



第5図 坪谷城跡出土青花②碁笥底碗および瓶 (S=1:3)



第6図 坡谷城跡出土白磁・青磁・国産陶磁・土器 (S=1:3)



第7図 坪谷城跡出土金属器

第IV章　まとめ

今回の調査では、城郭の主要部分が調査の対象になっていないこともあり、非常に限られた情報しか得ることができなかつたが、出土遺物のほとんどが主要城郭部分からの転落と考えられることや 16 世紀後半に限定できることなどから坪谷城が機能していた時期をほぼ特定できたと考えられる。また、出土遺物に被熱したもののが散見できることは、その廃絶の契機にも示唆を与えることになるだろう。

伊東四十八里に数えながら、城郭自身の文字記録が非常に少ないともあり、詳細を知ることは難しいが、先行するとされる東側尾根の構造も併せて、今後の検討に期待したい。

引用・参考文献

- 宮崎県 1999『宮崎県史叢書』日向記
- 宮崎県東郷町教育委員会 1999『東郷町遺跡詳細分布調査報告書』東郷町文化財調査報告書
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999『鏡野内中水流遺跡』宮崎県埋蔵文化財調査報告書第 16 集
- 宮崎県農政水産部農業振興課 1987『日向』土地分類基本調査 東白杵・日向地域
- 東郷町誌編さん委員会 1979『東郷町誌』
- 宮崎県東郷町教育委員会 2003『八ッ山遺跡』東郷町文化財調査報告書第 7 集
- 宮崎県東郷町教育委員会 2003『上野原遺跡』東郷町文化財調査報告書第 6 集
- 日向市教育委員会 2007『仲野原遺跡』日向市文化財調査報告書
- 宮崎県東郷町教育委員会 1991『極情遺跡』県営圃場整備序行(坪谷川地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 宮崎県東郷町教育委員会 1987『赤松遺跡・下水流遺跡』東郷町文化財調査報告書第 1 集
- 若山浩章 2008『山田匡徳と石地城』『図説 東白杵・西白杵の歴史』

番 号	種別	基盤	地層	出土地点	法面	断面	断面枝川・又様等	鳥居	壁	成	土	備考
1	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	(2.2)	(7.4)	2.7	断面	断面	既底	既底	既底部で1/7強保存
2	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	10.7	13.6	2.3	断面	断面	既底	既底	既底部で1/10強保存
3	青花	高台付近	既底	トレンド	—	14.9	—	断面	断面	既底	既底	表面が被熱により変色
4	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	11.6	13.6	2.4	断面	断面	既底	既底	既底で1/7保存
5	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	(10.9)	(5.2)	2.4	断面	断面	既底	既底	既底で1/7保存
6	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	(14)	(5.5)	2.4	断面	断面	既底	既底	既底で1/5強保存
7	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	(12.8)	(6.0)	2.5	断面	断面	既底	既底	既底で1/5強保存
8	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	(12.3)	(6.0)	2.4	断面	断面	既底	既底	既底で1/3強保存
9	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	(12.7)	(6.3)	2.6	断面	既底	既底	既底	既底で1/3強保存
10	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	(11.4)	(5.8)	2.3	断面	既底	既底	既底	表面が被熱
11	青花	高台付近	口縄～既底	トレンド	(11.8)	(6.4)	2.2	断面	既底	既底	既底	既底で1/6保存
12	青花	高台付近	口縄	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/3強保存
13	青花	高台付近	口縄	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	表面が被熱により変色
14	青花	高台付近	口縄	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/3強保存
15	青花	高台付近	口縄	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	表面が被熱により変色
16	青花	高台付近	口縄	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/3強保存
17	青花	高台付近	口縄	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	表面が被熱により変色
18	青花	高台付近	既底	トレンド	(14)	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で部分的
19	青花	高台付近	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/6保存
20	青花	高台付近	既底	トレンド	—	(2.2)	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/6保存
21	青花	高台付近	既底	トレンド	—	(8.2)	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/8保存
22	青花	既底	既底	トレンド	—	(6.5)	—	断面	既底	既底	既底	表面が被熱により変色
23	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/4ほど保存
24	青花	既底	既底	トレンド	—	(4.8)	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/6保存
25	青花	既底	既底	トレンド	—	(3.0)	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/8保存
26	青花	既底	既底	トレンド	(12.7)	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/7強保存
27	青花	既底	既底	トレンド	(14.5)	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/4ほど保存
28	青花	既底	既底	トレンド	(11.5)	—	—	断面	既底	既底	既底	表面が被熱により変色
29	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/3強保存
30	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/8保存
31	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/8保存
32	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/4ほど保存
33	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/4ほど保存
34	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/4ほど保存
35	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	表面が被熱により変色
36	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/3強保存
37	青花	既底	既底	トレンド	—	—	—	断面	既底	既底	既底	表面が被熱により変色
38	青花	既底既底	既底～既底	トレンド	(10.6)	(2.7)	3.6	断面	既底	既底	既底	既底で完全
39	青花	既底既底	既底	トレンド	—	(4.0)	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/6強保存
40	青花	既底既底	既底	トレンド	—	(2.6)	—	断面	既底	既底	既底	既底で1/3強保存
41	青花	既底既底	既底	トレンド	—	(4.8)	—	断面	既底	既底	既底	表面が被熱により変色

*括弧内の数字は推定数

第1表 坪谷城跡出土遺物観察表①



坪谷城跡遠景(南西方向から)



トレンチ2(堀切状遺構) 土層断面



トレンチ3土層断面



トレンチ4土層断面



トレンチ5土層断面



トレンチ6(近～現代の石組み)



トレンチ7土層断面



トレンチ8土層断面



トレンチ9土層断面



トレンチ10土層断面



トレンチ11土層断面



トレンチ14土層断面



作業風景1



作業風景2



笄



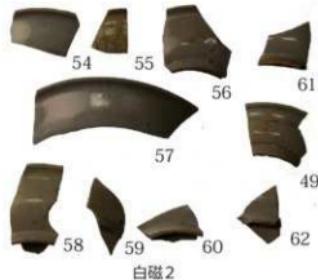
高台付青花皿



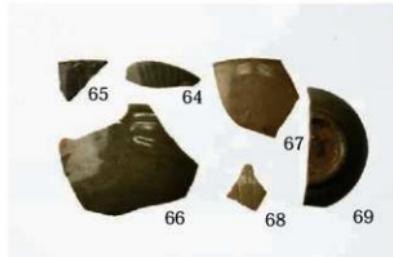
葵筋底青花碗



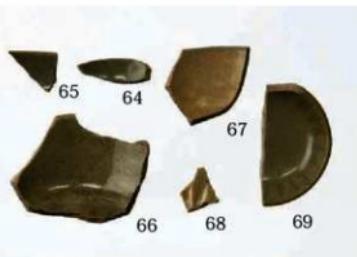
白磁1



白磁2



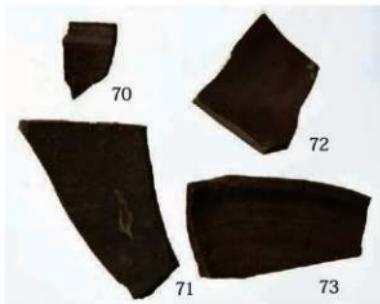
青磁外面



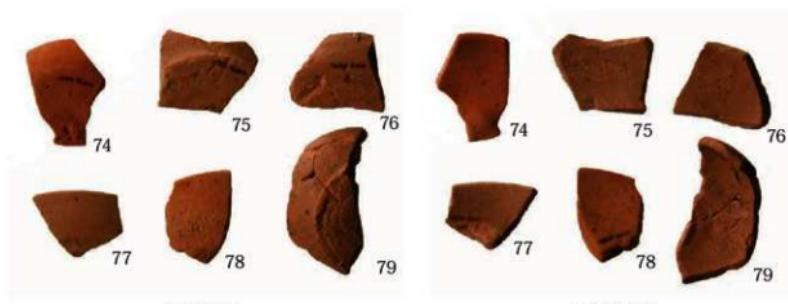
青磁内面



国産陶器外面



国産陶器内面



土師器外面

土師器内面

報 告 書 抄 錄

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 251集

坪谷城跡

本村谷川4 通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社ながと
〒882-0856 宮崎県延岡市出北4丁目2479番地
TEL 0982(33)4001 FAX 0982(21)5963
